

性は更に強くなる。

五時拉氏公館に歸る。市門の附近に子供の弓を弄ぶものを見た。

伊 太 利 と こ ろ ぐ (十九)

瀧 川 規 一

六時、持參の麵麴とジャムとで夕食を済ます。淋しい食事ではあるが、不平を云ふ者は無い。

【アシシ寺院の内陣參拜】眞夏の照りつける陽光は故國の暑熱を想起せしめる程に、屋根の瓦も庭の土も觸るる手を焦がさんばかりに熱してゐる。目的とする靈地は汽車の停車場から尙二哩許りもある。乗合自動車に汗染みた身體を詰め込まれて玉なす汗を拭きながら寺院附近のウキンザ・ホテルに着く。旅の身の不養生を恐るゝホテルで喰べたアイスクリームの快味は今日までも忘れ兼ねる。

【下の寺】寺院の入口に入るや堂内薄暗く冷氣さへ加つてそれが何よりも快感を覺える。入口 (Vestibule) から奥へへと進むにつれて澤

山な壁畫に目が留まる。近代繪畫の父なりと稱せられてゐるフロレンスの畫家ジョヴァンニ・チャブエ (Giovanni Cimabue) 及びその先輩のどことなく浮世離れの感じのする繪をはじめ、フロレンス派、シエンナ派、ウムブリア派の代表的畫家の麗筆が所狭げに天井や壁にぎつしり並んで居る。

入口近く左側にマドンナが玉座に坐し基督を抱いて居る繪がある。傍に三人の東方の學者が恐ろしい容貌をして立つてゐる。これはオッタヴィアノ・ネリ (Ottaviano Nelli) の筆である。抑もこの下の寺は一二二八年に起工され一二五

三年に竣工したものであり、この入口の部分は一四八八年以後に出来上つたと云はれる。ネリの繪は少し以前の二四四四年頃に描かれたと傳へられてゐる。この繪を出發點として聖マルチン(S^t. Martin)の祠堂に入る。祠堂は大伽藍内のひつ込んだ場所に祭壇を設け區劃を設けて祠堂と稱してゐる。

聖マルチンは紀元四世紀頃に榮えた羅馬教の聖者である。羅馬教會及びアングリカン教會では十一月十一日を以て聖者の祭日としてゐる。英國ではこの祭日をマルチンマス(Martin Mas)と稱しこの日には冬季の食料品として家畜が屠殺され、新らしき酒類の味が試みられ、陽氣な祭氣分が溢れる。こんなことからこの聖者は宿屋酒場の守護神となつてゐる。祠堂には聖マルチンの一代記を繪にしてゐる。聖マルチンは若き頃にアミアン(Amiens)の町の入口で一人の乞食に出會し、馬上から自己の衣服の半分を與へる。其の與へた衣服を着て天使が夢に現は

れる。聖者は皇帝ジュリアンの軍隊の士官であり劍と拍車を授けられる。然し騎士となつて武器をとつて敵に向ふことを拒み只十字架をもつて敵軍に會せんと云ふ。或る日禮拜式をなしてゐる時に全裸體の乞食を見、自分の下衣を與へ自分は副僧正から下着を貰つたが小さくて身體に適しない。聖衣の下に貰つた下着を蔽ふたが聖杯を捧持すると法衣の下から裸の腕が見える天使が忽然と現はれ、僧正の腕に黄金の腕飾をつける。ツール(Tours)の僧正となつて居た時或日忘我の境に入る。夢幻の境から僧正を呼び起さうと侍僧等がつとめる。遂に僧正は寺僧及び修業僧等に護られて臨終の床に就く。靈は天使に迎へられて昇天する。彼を葬る可き儀式が行はれる。以上の場面が一々壁畫の畫題となつてゐる。神秘夢幻の世界を近代の科學的精確を標準として見ることが抑も誤つてゐる。史實の如何を論ずるよりは繪そのものが與へる印象の方が大切である。筆者シモネ・マルチニ(Simon-

one martini)は十三世紀後半から十四世紀前半にかけて生存したシエナ派の巨擘であり、屢々文藝復興期の藝術の論者の口から聞くデオット(Giotto)と時代を全くし詩人ペトラルカ(Petrarca)の友人である。伊國の寺院に入つて名畫を見る者が常に憾とする處は場内陰暗にして且つ天井までの距離が高いが爲めに、神秘な繪をして益神秘ならしめることである。旅行者はオペラグラスの用意が必要である。

聖マルチン一代記に次いで忘る可からざるはデオット及び其派の筆になる基督一代記である。聖母マリヤが洗禮のヨハネの母親を七月二日に訪問する場面、百獸も亦悦を分ち持つ基督の降誕、東方の學者の參拜、教會に於ける禮拜、十字架上の基督、マグダレンに基督が死後に現はれた光景、ラザラスが基督によつて蘇生した有様滿目荒涼として樹木を見ざる埃及に基督が母に抱かれて逃げ行く處、幼兒虐殺の慘狀を目撃する母親等の苦惱、等々點檢し、その構圖の整

頓表情の明白なるに感ずる。うちにもチマブエによつて描かれたマドンナと基督それに配する女性使徒及び聖フランシスの繪に至つてはラスキンが口を極めて賞讃した程あつてマドンナの顔には人間界にして人間界ならざる魅力があり聖フランシスも亦現實界の相貌を備へて當時の人間を彷彿せしめてゐる。ラスキンの言によれば悲みの聖母(Mater Dolorosa)の繪のうちこのチマブエの像は最も崇高なものであり、畫伯以后如何なる畫家と雖も畫伯の胸中にあつた人間界の創造とその贖罪との間を連結する惡想の連鎖に一個の鎖も加へ得なかつたと云ふ。必竟するに美人の愁美にラスキンは叩頭したのである。

フランシスの墳墓の上には高き祭壇が設けられて居り祭壇上の天井には四つの大形の繪がある。これはフランシスカン派の四大教義を象徴したものである。上の寺にある聖フランシスの一代記と下の寺のこの四大義の圖とは數多の名

畫を見飽いた眼に猶も飽滿を感じしめぬものである。

第一義は純潔童貞の義である。畫題をサンクタ・カスチタス (Sancta Castitas) と云ふ。中央に櫓太鼓のやうな方形の城塔が高く聳え、塔上の中央に白旗が翻つて居る。白旗は純潔を表徴する。塔内には若き處女が祈つてゐる。處女は童貞を表徴する。二人の天女が兩側から處女に棕櫚の葉と聖書とを捧持し、中央の方塔の下に二人の戦士が居つて、城を守護してゐる。城下の中央には一人の少年が洗禮を受けて居り、左隅に黒衣の姿をして聖フランシスが三人の弟子を迎へてゐる。弟子は今よりフランシスの教に従つて天使の生活に入らんとするのである。右隅には翼を有し隠者の服を着けた苦行を表徴する人物が悪魔を退治してゐる。悪魔は三人であつて、現世、肉慾、惡鬼を表はしてゐる。これが純潔童貞の一大義を表はす象徴圖である。

第二義は從順を表はす。これをサンクタ・オ

ベチエンシア (Sancta Obedientia) と云ふ。長方形の吊行燈の樣に見えるのが教會の玄關である。玄關の屋根の上に僧院の服を着けて立つて居るのは聖フランシスであり兩肩に一つの軛を負うてゐる。左手には十字架をもつて居る。兩側には二人の天使が跪いてゐる。玄關内の中央には「從順」が天使の姿をしフランシスカン派の僧服を着けて中腰になつて居る。從順は一人の跪ける修業僧の頭に一つの軛をかけてゐる。向つて從順の左手には二重面をもつ「分別」が居る。右手には「謙抑」が居る。兩者の下手には天使が居り、天使の一人は惡魔セータンを驅逐して居る。その他多くの天使が兩隅に跪いて居る。

第三義は貧困である。サンクタ・パウペルタス (Sancta Paupertas) と云ふ。聖フランシスが「貧困」と云ふ婦人と結婚したと云ふ義を表はす。畫の中央に枯槁憔悴の姿に襤褸を纏ひ、素足で荊棘を踏み、一人の少年は石を投げ他の少年は荊棘を突きつけてゐる。この襤褸姿の婦人

はパウベルタ婦人である。岩石の廣野に基督は聖フランシスとパウベルタの手をとつて結婚式を擧げてゐる。夫人は「希望」と慈善とを介添女として侍せしめ、自らは「信仰」の代表をして居る。夫人の背後には薔薇と百合とがある。左隅には一人の男が乞食に衣服を與へて居る。右隅には立派な服裝をした者が一人は手に鷹を持ち一人は金の袋を持つてゐる。この繪はダンテの神曲の天國篇(Paradiso)から暗示を得たと云はれて居る。

第四義は光榮の聖フランシスであり、グロリオス・フランシスカス(Gloriosus Franciscus)と稱せらるる圖である。教會執事の服裝だと云はれて居る金繡眩ゆき服を着てゐる。英國史を繙けば女皇エリザベスが老齡の身を包んでゐる盛裝の異様なるに驚く。聖者がそれに似た服裝をしてゐる。これが紙子を以て教衣とするこの聖者の光榮の姿だと思ふ時些か皮肉の感がする。天國の華麗莊嚴の有様は矢張油繪の天國で

あつて吾邦の繪卷物に見るが如き清閑靜寂の境ではないらしい。それは兎に角として聖フランシスは片手に十字架をもち片手に教團の規則書をもつてゐる。歡喜に充ちた多くの天使は或は唇を開いて居り以て歌を唱つてゐる様子を表はし或は喇叭或は笛をもつてゐる。何れも雲の上に浮游し天界に昇らんとする有様である。

以上の多くの大小の畫はデオット・デ・ボンドネ(Giotto di Bondone 1267-1337)の作だと云はれてゐる。彼の描く處に聲があり彼の作圖は人間の經驗となると云はれ、神聖なる歴史、聖者の傳より取材して人間の情緒をあらはすに妙を得たりと稱せられて居る。彼はフロレンス派の第一人者であつて、その影響の及ぶ處も大である。またダンテやペトラルカの友人であつたことも吾人の記憶する處である。

聖クララと云へば舊曆七月十九日を祭日とする長崎附近の家野村のヨカ盆を想ひ、お盆に歌はれる「家野はよかよか昔からよかよ、サンタ・

カララで日を暮す」の歌は今更の如く聖クララの花やかなりし娘姿をリッポ・メモミ (Lippo Memmi 1285-1357) の筆になる肖像によつて想起する。寫實的な丸顔のあどけない顔の肖像はサンタ・キアラ寺にあるものであるが、アッシシの寺にあるシモネ・マルチニ (Simone Martini 1285-1344) の筆であるサン・クララ・デオット (1267-1337) の同肖像、マルチニの同肖像の三つの肖像は何れも理智に富んだ面長の美婦人である。而かも各傳へる印象を異にする。

デオットの描いたマドンナの顔、ロレンチェツチ (P. Lorenzetti 1300-1348) の描いたマドンナ、更に降つて一五一六年に描かれたロ・ズバニア (Lo Spagna) のマドンナの三者を比較し、後世に至るに従つて人間味の増加を覺えるのである。何故か初めの三畫に於ける赤兒の基督が赤ン坊らしくなく、愛を感じずるよりも憎たらしさを覺えしめるやうな、マセかたをしてゐる。

【上の寺】上の寺は伊太利に於てゴチック建築が未だ知られてゐない時に建てられたと云ふので、建築の古式を誇としてゐる。内陣にはチマブエ、及びデオット、などをはじめその弟子達の筆になる壁畫があり近代伊國繪畫歴史の初を物語つてゐる。内陣の壁の上部は舊譯聖書中の場面を描き、下部は聖フランシスの一代記を描いてゐる。而かも二十八枚と云ふ長い挿話の連續である。一つの挿話が一枚の繪をなして居る。繪から繪に移る毎に神秘から神秘へと移り奇蹟から奇蹟へと移る。神秘は科學的に解剖し説明し得ない。聖フランシスの史實の一代記は既に述べた。今見るものは繪の題材に相應しき神秘の一代記である。神秘は神秘とし奇蹟は奇蹟として其儘に承認したい。其處に有難味がある。神秘境の雰圍氣はこの有難味である。

怪疑をなす者は自ら幻滅を招く徒輩である。

繪になつた挿話の一代記は斯うである。

【繪になつた挿話の一代記】スピニ (Spini)

家の館にある塔上から同家の小供が墜落し墓地に運ばれんとした時聖フランシスを呼んで蘇生の奇蹟を依頼した。小供の母親は信仰篤き婦人であつた。若し小供が復活されるならば新しきリンネルの布(Sidon)を以てフランシスの祭壇を掩はんと誓つた。白衣の教團僧及び友僧は死兒の家に集り来る。上階では聖フランシスが起死回生の活を行つてゐる。一友僧は階段の中途まで降り來り奇蹟奏効を教僧に傳へてゐる。母親は新しきリンネルを手にして後に續いて階段上に居る。聖者が人工呼吸式の如き蘇生術を施して居る繪は特に注目に價する。居並ぶ男女の人々の顔が各自表情を異にし寫實味を帯びてゐる。向つて左の隅に立ちて右手を頤まで舉げ人差し指で頤を抑さへて死兒の様子を見て居るのは畫家ジョットの自畫像だと云はれてゐる。ジョットは寓話神秘の世界經典の世界から踏み出して自己の時代相を描き寫實的傾向の天才を充分に發揮して居ると或る評家が云つたのはこの

伊太利ところへ

繪である。

フランシスに歸依する一人の白痴がアシシの町に居つた。フランシスに會する毎に身に着けたるマントルをとつて地に擲げ聖者をしてその上に歩を運ばしめ敬崇の價值ありと豫言した。或日フランシス騎馬で外出する。途上で高貴の出である士官に會つたが、士官は貧にしてみずぼらしき風體をしてゐる。フランシスは自分の外套を脱いで士官に與へた。翌夜夢に基督が現はれ、十字の記標のある武具及び旌旗に充滿せる華麗莊嚴なる宮殿をフランシスに示し、靈の軍隊の徴候を見せた。

或日聖フランシスが既述の如くサン・ダミアノの舊き教會で祈禱をなす。その時十字架から聲が聞え「フランシスよ行つて壞れんとする吾が屋を修繕せよ」と云ふ。この聲の崇りが父子の争となり、アシシの僧正の面前で、フランシスは着せる衣服を脱して父に歸す。繪では聖者が半裸體になつてゐる。

夢に法王インノセント三世は聖者が倒れんと

する教會を支持して居る處を見、基督の教會を維持するものは聖フランシスなりと悟る。法王オノリアス三世は遂に説教することをフランシスに許可し高僧等(Cardinals)に圍繞されて法王は教團の規則を書ける巻物を授與する。書中踞いてこれを受け居るは聖フランシスである。一つの書では聖者が踞坐して説教をなして居る。

或る夜のこと、聖者の不在中教團の兄弟達は火の車が奔馬に引かれ車上には眼を眩惑せしめん許りの光眩き火の珠が載つてゐるのを見た。教友の人々はこれ聖者の靈なりと知つた。或日教友バシフィロ(Pacifico)が聖者と共に廢棄されたる教會に入り聖者が熱誠なる祈禱を捧げてゐると天國に設けられた裝飾豊麗なる玉座を見た。彼は聖者が天國に入つた時の用意が既に出て居るのだと悟つた。

アレツツォ(Arezzo)の町に黨派争ひが起つた。聖者は教友のシルヴェスタ(Era Sylvester)を遣はして聖者の名によつて空中から黨争の因

たる惡靈を驅逐した。佛蘭西の東南部にテローン(Rhône)河畔にあるアール(Arles)の町で聖者の教團の總會が一二四年に開かれた。その時集れる教僧の真中に聖者は兩腕を伸ばし恰も十字の形をなして姿を現はした。既に述べた如く基督が十字架上で受けた手足の釘傷そのまゝの傷痕をフランシスがアルベルナ山上(Monte Alverna)で身に奇蹟的に得た所謂スチグマタ(Stigmata)が繪になつてゐる。殉教的事業の最後を飾る爲めにシリアのダミエッタ(Damietta)の異教徒に説教に出かけ敵軍に捕へられ國王の前にひき出された時回教の僧と共に火焰中を共に歩み信仰の堅さを試験せんと云つた。國王は聖者の火中歩行を避けて聖者を放免し歸國を許した。

或夜聖者が聖餐式にて神と靈交をなせる時教友等は聖者が地上から空に騰り十字の形に兩腕を伸ばしてゐると天空から基督が現はれるのを見た。基督降誕日にフランシスが馬槽と秣とを

用意し、牡牛と驢馬とを牽き來つて人々を集めその佳日を祝つた。彼が聖槽(Presenjo)の前に敬虔なる歡喜の相を表して跪いてゐる時、槽中の幼兒はフランシスに抱かれて兩眼をぱちりと開くのを見たと言ふこの聖槽の造り物はグレチヨ(Greccio)で聖者が初めて行つたのであるが、伊太利では諸處で行はれ、フラシスカン派の教徒中には特に聖者のこの行に模してよく行はれる風習がある。(續く)

摘 録

○第三紀に於ける太平洋に關する知識の最近の進歩とウエゲネルの假定

(Les recents progrès de nos connaissances sur l'histoire du Pacifique aux temps tertiaires et la theorie de W.egenér note de M. L. Joleaud : Comptes Rendus Tome 192. No 10. 1931)

最近の多くの觀察の結果太平洋中央の諸島(マーシャル・フィジー・トンガ・クック)より始新世漸新世及び中新世の有孔蟲 Nummulites, Pellatispira, Operculina, Orthophras-

emina, Spiroclypeus, Lepidocyclus, Miegopsina の存在が分つた。尙ほ太平洋西部の諸島(小笠原・ビスマーク・ニュート・ブライズ・ニューカレドニア・ニュージラント)の同時代の地層からは古くより前掲諸屬に屬する有孔蟲が發見されて居た。

近年 Lepidocyclus に就いて H. Douville, W. Van der Vlerk, J. A. Cushman が細密に研究した結果、Polyplepina 及び Pileopina の分布が印度太平洋地方及びアンチル諸島のみでない事が判つた。Polyplepina proxeiformis はメキシコとクック諸島より産し、Pileopina は一方ではトリニダッド、パナマ及びメキシコに産すると共に又ボルネオ及びスマトラからも産する。Amphilepina 亞屬の中でマダガスカル、日本南部、マレー群島、ニューギニアに産する L. sumatrensis はニューヘブライズ及びフィジーからも知られてゐる。然るに本種はアンチル諸島(キニバ、ハイチ)では近縁種に依つて代表されて居る Douville は Amphilepina の内でキニバ産のものを含む星形のもの一部をマダガスカル、マレー、オーストラリア、ニューヘブライズ、フィジーより記載されて居る L. radiata 及び L. martinii と一緒にして分類した。最後に Eulepina の内 L. formosa はマダガスカル、マレー、ニューギニア、及びニューヘブライズ、フィジー、クック群、トリニダッド、パナマ、メキシコから發見された。